

## 渚上敦賀市長は日本原電敦賀原発3・4号 機増設を条件に高速増殖炉 もんじゅ」の 立地市としての廃炉判断を早急に下せ！

欧米が見限った危険な高速増殖炉を何故続けるのか？

消費した以上のプルトニウムを生み出す 夢の原子炉「もんじゅ」は崖っぷちに追い詰められ 危機的状况にあるにも関わらず、文科省と原子力開発機構は延命を図ろうと時間稼ぎに躍起だ。

西川福井県知事は検討会の議論で もんじゅを生かすか否かを話し合う最後の機会」と述べている。渚上敦賀市長も節目も変わった今こそ立地市の首長として国策である実験炉 もんじゅ（30年を経過も目途立たず、プルトニウムによる風評被害に頼ることなく将来を見つめ、敦賀市が

日本海最大の陸と海の物流拠点化を目指し経済拡大への大胆な発想と改革が望まれる。

31年前の昭和60年に研究段階の原子炉として着工した高速増殖炉 もんじゅ」は、平成22年5月に2年後の本格運転を目指し運転を再開したが、8月には炉内中継装置落下事故で稼働できず、現在に至るまで再稼働の見通しはたっていない。

着工から10年後の平成7年にはナトリウム漏えい事故が起き、事故での事故情報隠れいも話題となった。

冷却材に使用するナトリウムは空気や水に触れると激しく燃焼し、コンクリートと反

応し水素爆発により建物を損傷する危険もあり、液体ナトリウムが沸騰し出力上昇を起

こすリスクもある。炉心にはプルトニウム18%を含んだウラン・プルトニウム混合酸化物燃料を詰め込んで燃料棒が近付くと出力が上昇する性質もある。また蒸気発生器で細管が破断すると高圧の水がナトリウム中に噴出して、反応すると重大事故にも至る恐れがある。

世界中で稼働し更に原発建設が進む中、国内に40基ある既存の原発の地下に1万年前の断層があり再稼働できない、とは格段の差がある。現在 もんじゅ」には茨城

県東海村で再処理した燃料棒が198体炉心に入っており、原子炉が停止していても冷却水に使われているナトリウムはヒーターで温め200度で巡回させ毎日高額の電気を消費。発電所が発電もせず、毎年破格の電力を使用しているという不合理さ。

原子力政策を管轄するのは経済産業省だが、もんじゅ」は研究開発の炉と位置づけのため文科省が管轄する。原子力規制委員会は昨年11月運営組織を原子力開発機構から変更するよう管轄の文科省へ勧告を行ったが、新たな運営組織の特定に至っておらず、政府内からも「廃炉やむなし」の声も出ている。

これまで1兆円以上の国費が投入されながらトラブル続きで、今なお年間200億円の維持費が計上され毎日5500万円を浪費する金食い虫となっている。